丸山　美由紀／クリストフ・エーレンフェルナー

大山町民文化会館/2002年2月17日

ベートーベンの「ピアノソナタ17番」の2楽章。セレクトされた音だけによる語らい。キラビヤカなメリハリはない。流れる様なスピード感もない。どちらかといえばストップモーション。各断片の静かな斬り口が魅力的である。ポツリポツリとヒソヒソ話かモノローグ。不必要で余分な音を排除。ホール全体の空間を、鳴っている音の存在の重みが支配する。静寂な中の寡少な音の価値。研ぎ澄まされた感覚と集中力。計算された音の響きの絡み合い。ピアニストの音を見つめる目とココロが反映する。女性らしい柔らかさと優しさ。美しさ、キレイサを見つけれるナイーブで敏感な感覚。それを十分にあらわせる才能にハッとする。聴き手の感覚も引き込まれてシャープになる。

次は一体どうなるのだろう、どう表現するのだろうというワクワク感。情報の多さに鈍感になっていた素直な好奇心が顔を出す。そしてピアニストが示すステキな答えにニコニコしてしまう。感情豊かでドラマチックというわけでないが、優しさに裏打ちされた考えられたモノである。この演奏家しか感じ得ないオリジナルな回答である。美しいものに素直に感動、そのキモチを慎重に表現する。そして、どうでしょうかと問いかける。美しいモノの繊細なニュアンスを追い求め悩むスガタ。誇張なく深刻ぶることもなく、背伸びしていない等身大のスタンス。飾らない演奏にピアニストの感情の素顔を見る。聴衆を意識せずにノーガードで作曲家と対話し続ける。ストイックな姿、演奏家の選んだ道、切り札。ココロを込め屈託なく真摯にその作業に没頭する演奏家が美しい。ステキな2楽章である。

ベートーベンとシューベルトのヴァイオリン曲。ピアノの役割、伴奏という主従関係に終始しない。よりよい音楽を創りだすため、独立したパートを演ずる運命共同体。自己主張のぶつかりあい。ピアノとヴァイオリンのためのという言葉を改めて意識する。ディベート的判断じゃイケナイのだろうがピアノの言い分が勝っている。読み勝ちといったら欲目の贔屓目なのか。ヴァイオリンは天才肌というかクライマックスの一瞬にイノチを賭けているよう。全体を通して意志を表わすことはない。アンコールのクライスラー、主奏伴奏という主従関係が戻ってくる。

ベートーベン：ピアノソナタ 17番 ニ短調「テンペスト」
ベートーベン：ヴァイオリンソナタ 7番 ハ短調 Op.30-2
シューベルト：幻想曲 ハ長調 Op.159
（アンコール）
クライスラー：奇想曲

クライスラー：愛の悲しみ

クライスラー：愛の喜び